

タイトル：2014 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No.9)

日時：2014年11月29日（土）10:00～13:20

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

The Criticism of Despotism through the Fiction in the Arab World: An Outlook of Jurji Zaydān's Elitist Approach and 'Abdullāh Nadīm's Defense of Peasants

岡崎 弘樹（パリ第3大学アラブ研究科）

本報告では、19世紀末から20世紀初頭にかけてフィクションを通じて専制政治への批判を行ったアラブ人作家の内、バイルート出身の歴史家・小説家ジョルジー・ザイダーンと、エジプト出身の思想家・活動家アブドゥッラー・ナディームの思想と作品について論じた。

ザイダーンはロマン主義的歴史小説を通じて、1860年代以降にアラブ世界で形成された新たな教養層を読者対象に物語を提供した。初期二作品『マムルーク朝の圧政』と『アッバーサ、ラシードの妹』においてむき出しの暴力の行使者たる伝統的な暴君像を描いた一方、後期作品『オスマンのクーデター』では、一見穏健さや寛容さを示す近代の専制者が帝国全土にヒエラルキー的に広がる無数の諜報ネットワークによって支えられているという、権力の「構造」を描き出した。他方、ナディームは、ウラービー革命前夜に戯曲『ワタン』において知識人や農民、欧州かぶれのプチブルジョワ等多様な社会階級の出身者が織りなす世界を日常会話を用いながら描き、「金持ちの専制批判」を行いつつも、植民地主義権力に対抗する上で階級的分断を乗り越えた国民的団結を訴えた。報告では特にナディームが独白調ではなく、対話調の中から生まれる知を重視した点、また日常生活空間の背後にある巨大かつ抽象的な政治的秩序を農民に理解させるために比喻を多々用いた点を強調した。

本報告に対し、マーリク・シャリーフ元 AUB 教授から（1）ザイダーンが A・ドゥマなどの欧州歴史小説に影響を受けたと言うが、アラブ・イスラーム世界の内的伝統との関連もみるべき、（2）またナディームは「対話」形式の重要性を強調したが、ザイダーンの小説内でも同様の形式はみられる、（3）ウラービー革命の際にバイルートに逃げてきたエジプト人も同地で同じく「欧州かぶれ」文化を発見した等々と貴重な批判や補足的意見を頂いた。またその他のコメンテーターからも、当時の政治理論とフィクションの関係をもう少し説明して欲しい、あるいは現在報告者が取り組んでいる研究の全体像の中で本報告がいかなる位置づけにあるのかと問われた。

とりわけシャリーフ教授の詳細にわたる指摘から本報告の課題が明らかになった。現在準備中の博士論文の2章分をフィクションという共通項でつなげて報告したものの、短い口頭発表においては報告の主軸が見えにくくなったことは問題であった。またこちらが同じ共同体に生きる

「国民」としての意識という意味で「ナショナル」と使っても、聞き手には汎アラブ民族主義的なイメージをもたれてしまう等、イデオロギーに関わる議論についてはより慎重な説明が必要だとも痛感した。

しかし、特に後半部分のナディームに関して、社会風刺と諧謔を交えたスキットを紹介した際には会場から笑い声がもれるなど好反応を得たと感じた。また質問に対し、報告者が「ナフダ第2世代の政治思想は、イブン・ハルドゥーン等に遡るアラブ世界の伝統的な政治理論と、西欧近代の啓蒙思想や社会進化論という2つの伝統が、矛盾と和解を含みながら共存している」と返答した点については大変興味を持って頂いたように思う。

報告会後の食事会も含めコメンテーターや参加者との意見交流の中で斬新な見地や歴史的事実、また重要な資料を知ることができた。このような機会を与えて下さった東京外大AA研の方々に深く感謝したい。